

写真展紹介

鄭周河写真展 「パラ-ダイス」 Para-Dies

福島第一原発事故による放射能汚染を記憶にとどめる

2025 年 9 月 20 日～10 月 3 日 関谷興仁陶板彫刻美術館 朝露館

朝露館 関谷興仁館主による紹介

福島原発事故直後から現地を訪れ、写真を撮り続けた韓国の写真家鄭周河さんの初めての写真展が開かれてから12年の歳月がたちます。

写真展「奪われた野にも春は来るか」は日本の植民地となり大地を奪われた朝鮮人の悲哀を歌った李相和の死と重ね福島の悲しみを表現したものでした。写真展は全国を巡回して大きな反響を呼んだのはご存じの方も多いと思います。

人々を不安のどん底に陥れた原発事故の記憶の「風化」がささやかれる今日、その後も福島を撮り続けてきた鄭周河さんを日本に再びお迎えすることになりました。

テーマは「人間と牛と自然」。原発の存在を根源から問う作品20点です。記憶にとどめ過去から学ぶ当美術館としては公開10周年にあたって、このうえない企画展となりました。朝露館館主 関谷興仁

(写真展 「パラ-ダイス」 Para-Dies ポスターから転記)

メッセージ

「パラ-ダイス (Para-Dies)」写真展へようこそ 鄭周河

今回の作品集「パラ-ダイス」は福島県浪江町にある「希望の牧場」とその周辺で撮影したものです。

ご存じのように浪江は福島第一原発から十四キロ、放射能による被害が非常に大きかった場所として知られています。この牧場には、今も約百七十頭あまりの牛たちが飼育されています。牛たちは大量の放射能を浴びて国から殺処分命令を受けました。しかし、牧場経営主の吉沢正巳さんは命令を拒否し、今まで牛たちと共に、そこで生活しています。

牛たちは、人間の犯した過ちをその身で受け止めて生き続けています。人間によって「殺されることを免れ、死ぬことができず、死ぬことができないために生き続け、苦痛を全身に刻み込んでいる」のです。従って原発事故の最も「鮮明な証言者」が、まさにこの牛たちではないのかと私は考えています。

私はこれまで、写真家としてこの牛たちの間に入り、彼らの仕草や何気ない優しさを感じながら撮影してきました。牛たちは私に怒りの表情も苦痛の表情も向けませんでした。私は一人の人間として、非常に辛い気持ちで牛たちと向き合い、彼らが「私/人間」に「どんな話しをしたいのだろうか？」という思いを抱きながら、長い時間を牛とともに過ごしました。

牛とともに展示した木の写真は、牧場近くの裏山で撮影したものです。この葛(くず)のような蔓は、かなり古くから自生していたようで、絡み合ったり、他の木に寄生したりしています。蔓は他者に依存して生きている点で、希望の牧場の牛たちと同じだと感じました。牛の写真とこの蔓を一緒に展示する理由です。私、鄭周河とともに、彼らの表象と内なる世界を訪ねてみませんか。

(写真展 「パラ-ダイス」 Para-Dies ポスターから転記)